

宣言はしたものの職安のわずかな吏員では、黒色自由労働者組合の実力行使（当時は、このような言葉はなかった。暴力阻止である）を恐れる。

「僕たちは登録制にしたくはないか、本庁（警視庁）からの命令だから仕方がないんだよ」と言い逃れる。

「よし、そんならあくまで反対するぞ」と北浦たちは宣言した。

登録制実施の第一段階は、登録券製作で、その券に貼る写真の撮影であった。これは、初期は木造のブラックであった職安が、やっとコンクリートの二階建になって、その屋上で、映画の旧式なカメラが持ち込まれて、そのカメラの前で一人づつ立たせて、一駒落して撮影する手段がとられた。大勢の労働者が素直にカメラの前に立った。それを知ると黒連の連中は、「よし、屋上に行つて、カメラを引繰り返してこわしてしまえ」と張切つて出かけてゆくのだつたが、職安でもその位は予期していて、本庁と連絡をとっていた。今日ならばさしづめ機動隊出動待機ということになるのであろうが、当時は大日本帝国で軍隊が存在していたので、警視庁には

それほどの武力はなかった（新撰組と称する表向は交通巡査の暴力団は保持されていた）それでも黒連の数名を阻止する位の實力（暴力）は保持していた。

北浦漢たちが勇躍して「撮影をやっているのか、よし屋上へ行って蹴散らしてやるぞ」と数名で屋上に駆け登ると、カメラの周囲をグルリと護衛している四・五名の私服がいた。いずれも見るから肩幅の広い八十キロ以上のガッチリした巨漢であった。

「こら小僧たち、ちょっとでも手出しをしたら容赦せんぞ」という鋭い視線でねめつめた。そして張つたりの示威だけでなく、間違つてカメラに近寄つた者は、「こら」と一喝されてはじき飛ばされた。この私服は、いづれも柔道四・五段のモサである。本庁と各署の柔道師範が選抜されて警備にきていたのだ。これには黒連の青年たちも手も足も出せなかった。

この頃を契機として黒色自由労働者組合（A.O.連盟も含めて）に対する干渉弾圧は次第に激化しだした。本庁のアナキ系特高の指揮にもとづいて、組合員の検束、拘留が激げしく頻繁になり出した。

このような組織としては弱体なA.O.労働者連盟ではあったが、一日の労働のあとで研究会を開いた。岩佐作太郎、八田舟三を招いては、そして当時としては唯一のアナキ系の月刊機関紙（印刷工が主体になって発行していた）自由連合新聞の配布にも協力していたし、これに毎号のように掲載されたよき漫画の描き手は、沢田鉄というボルの江東自由労働者組合員であった。沢田はアナキストだったが、江東に住んでいたために仕方なく江東自由労働者組合に属していた。我々とは仲がよかった。沢田は後年小山内龍という漫画家として一家をなし、アナキストチックな画集も出版した。四十前で惜しくも夭折した。

ギロチン社事件の新聞記事

一九二四年十一月二十六日付『東京朝日新聞』は次のように報じている。傍点部分は五号活字を使っている。

「銀行員殺しから 富豪脅迫団暴露す

検挙された恐るべき秘密結社

一味十二名の予審終結

昨年十月十六日白昼大阪府中河内郡大軌小坂停留場付近で十五銀行玉造支店小坂詰所主任角田芳蔵（55）同行員浅田宇之助（61）の帰途を襲撃して角田を殺害し、浅田

前記の自由連合新聞の印刷所がバイ公ポリ公に包囲されて持出し困難の場合は総力をあげて新聞を持ち出して発禁された新聞の防衛もした。後年、右翼に転向した菊岡久利も当時は高樹寿之介といつて純情なアナキストで可成り危険を犯して「おとり」となり新聞持ち出しに協力していた。

黒色自由労働者組合は当時としては異例で「略」をやらず、労働賃銀の零細な金を集めて自力で雑誌「労働者」を発行したが、即日発禁となり極くわずかししか配布できず、一号で休刊といつか廃刊するより仕方なかった。

つづく

に重傷を負わせ、角田の所持せる手提鞆を強奪逃走した犯人は同年十一月初旬十五銀行の前身浪速銀行員であつた。兵庫県神崎郡豊富村、小西伊蔵二男小西次郎（25）

△岐阜県羽島郡松枝村生れ、河合徹事河合康左右（26）

△東京市小石川区原町、茂野栄吉（21）

△岡山県真庭郡二川村、内川源次郎（19）

の四名が検挙され大阪地方裁判所で取調べ中の処意外にも犯人は右四名の他多数ある事判明、引続き検挙の結果

同年九月大阪市北区堂島電気倶楽部の街路で東洋紡績常務取締役庄司乙吉氏を狙撃した兵庫県有馬郡生れ、当時神戸市須磨町労働ブローカー仲喜一(24)及び、十月四日三重県松坂町で大杉栄を殺した甘粕大尉の実弟甘粕五郎に斬りつけ安濃津地方裁判所で懲役五年に処せられた山口県阿部郡萩町当時住所不定労働ブローカー田中勇之進(21)もこの銀行員殺し事件に濃厚な関係ある事判明し、更に福岡県企救郡東郷村生れ著述業中浜哲事富岡誓(28)、△大阪市北区今井町、土方、伊藤孝一(25)△神戸市神若通り神戸市立労働宿泊所内、小川金英事小川義雄(21)、△東京府荏原郡目黒町鈴木辰夫方、上野克己(20)ら外二名総計十二名が「団」となりこの事件を敢行したほか、会社銀行を荒し巨額の金円をせしめこれ

野 火

島 哲平君(福岡)から

こんど上京する機会があり、東京のアナーキストたちと会い、語り合う中で現在のアナーキズムの潮流を知ることができ、よい勉強になりました。

大正、昭和初期のアナーキストたちが、いわゆる書斎派と行動派とに分れて論争しあっていたように、今でも

を資金に驚くべき計画を立てていた事実迄判明し、爾来審理を進めていたが、いよいよ二五日予審終結し、小西、茂野、内田、河合ほか一名は強盗殺人脅喝、△仲は殺人未遂強盗脅喝、△田中は強盗脅迫、△富岡は強盗殺人教唆未遂教唆脅迫、△伊藤、上野ほか一名は脅迫罪にて何れも大阪地方裁判所の公判に付せられた。一味は何れも社会主義者で主義宣伝の資金及び生活費を得るため秘密結社を作り、東京横浜両市の大会社商店におしかけ無心を吹掛けて脅迫し、その筋の警戒厳重となったので関西地方に入りこみ、あらゆる悪事をしていたものである。Lセンセーショナルな書き方は今も昔も変らぬ。歴史研究者の為に資料として掲載した。H S

口角泡を飛ばして批判し、憎みあっているというようなイメージを描いていたが(何故こんな思い違いをしていたのかは疑問だが)、私の眼の前で、その人たちは穏やかに語り合い、アナーキズムや文芸あるいは宗教に関して議論しているのだった。それを見て感心と安心を同時に味わい、矢張り「アナーキスト」だ。アナーキズム

の多様性がここにある、と痛感した。しかも、その底には、アナーキストと称する者の中の偏マルクスの態度に対して強い批判があるのを知った。

地方にいてベ平連に加っていて、その退廃と脱落の中で、いつも空虚を感じていた。政治スローガンに集約され、党派的反動分子や政治主義に利用され指導され、嘔吐を催すような中傷と下劣な批判の被害者だった。そうした中で私の焦燥は、こんどの上京によって空中に飛散してしまった。あるアナーキストは言った。△そんなデモや集会が何になるんだ。ひとつの政治的スローガンで人間の意志を統一するなんて、おかしいじゃないかと。私は亜然としたが同時に心の空虚がすっかり満たされたような感じだった。そうだ、その通りだ。政治的かけ引きによる沖繩返還に徒克を組んで阻止や反対を叫んだところで政治屋に利用されるだけではないか。私にとっては返還日に休日がもらえることがの方がもっと大切なはずだ。私には渴望していることがあり、その渴望をいかに生活の中に展開し、充実させることが重大なのだ。それが個性であり、自由の領域に関することなのだ。

そして綿引邦農夫君に会った印象を書いている。

綿引さんは小柄で七十七才?とも思えぬ。元気がよく、ピンクがかった顔や手の皮膚、さらに純白で子供みたい

にかわいい歯並は、近来あの位の老人には見かけなかったものである。それはやはり若い頃からアナーキズムを戦い続け、今もお若い精神的エネルギーが、そうさせているのだと思う。

労働運動に関していろいろたずねると、流暢に何の滞りもなく一生懸命に話してくれた。几帳面にならべられた棚から無政府主義運動を引っぱり出したり、岩佐さんの演説乗取り、その巧みな弁論についてなど話は尽きない。パンフに××式の伏字の多いことを言うと、昔はパンフだけではなく、演説の時でさえ、側に臨検の警官がいて、少しでも過激だと思ったら注意したり、中止を命じたものだ。そんな時とは、口をつむぐしぐさをしたり、足を開いて手を腰にまわし、丹田に力を入れて演じて見せ、聴衆がそこで「分った」「よし」「と声をかけるところ、そうした演説者と聴衆が一体になった話を、しぐさを交えてするので思わず笑った。今こそ笑えるのだが、こんな時期がまたやってくるような気がする。彼の話をそ被支配者の語る歴史だ。...

×

浜松の○君から

浜松ベ平連も解散状態となり、周囲が次第にボル化してきております。ベ平連の人も一人白ヘルの下働きにな

り下りました。その中で僕は今のところなすすべなしという状態。しかし平連のONT化という夢は捨てておりません。ボル共に対しては、時としては（特に中核）暴力をもってするという気を起し、ブンドの人と少し話をしたことがあります。しかし、ボル同志の中ではと思いつき、結局ナンセンスなことと思ひ直しています。

×
白井新平君から

・・・ノンセクト、純真なわれわれの若き日の好青年たち、赤軍リンチといい、テルアビブといい、傷ましい、ただ傷ましい。このノンセクトに希望と方向を与えてやれなかったことは、おれたちの世代のアナキストに近いものの責任である。まだまだこういういい魂が懐えになるのかと思う心がいたむ。

×
海老根 茂君から再度

リベルテール五月号に僕の質問とその解答のために貴重な紙面をさいていただきありがとうございます。でもまだ良く分りません。前と同じ繰返しになるかも知れませんが、もう一度書いて見たいと思います。

この世に資本家というものが現れる以前から、つまり貨幣がある以上、金儲けをする欲望、したい欲望という

のはあったはず。だから僕の不思議がっていること——資本家の幸福って何だろう——は、単純に「何故人は金儲けをしたいんだろう」としてもいいんじゃないでしょうか。

はたして資本家さんたちは幸福なのでしょう。僕は幸福だと思います。労働者を搾取しているという事実を意識しているかどうか知りませんが、とにかくその地位から退くことをせず、いつまでも搾取し続けるところを見ると、余程資本家という身分が安住の地なのでしょう。もちろん資本家という地位にいるためには相当無感覚な非人間的な心を持った人でなければ勤まるものではありません。あらゆる公害を撒き散らし、自然を破壊し、人を殺し、廃人にしておきながら、なお責任を明らかにしないような心の持主でなければ……だけど幸福というものには、ある特定の人しか与えられないものなのだろうか。いや違う。幸福は万人に与えられなければならない。資本家は自分個人、あるいは自分の家族のみを幸福にし、その他の従業員の幸福を奪っている。従業員の犠牲によって資本家の幸福が成立っている。……万人が幸福になるためには革命が必要ということになる。革命が起って万人が平等に社会の物質的富を分け合うことが出来たとして、それが万人の幸福につながるか。決して

そう単純なものではないと思う。物質的富を分け合ったところで精神的幸福がなければなんにもならない。では精神的幸福って何だろう。……科学の恐るべき発達一部の科学者による科学の独占、科学の民衆からの遊離の原因でヒッピーなどの運動も起るのではないか。赤軍派などのことも精神的貧困がひと役買っているように思える。……一九七二・六・六。

前にお答えしたとき、海老根君が求めていた「幸福」について十分お答えしていなかったことが分った。と言っても今度十分にお答えできるかどうかは分らないが、何とかまとめて見ることにする。

最初に貨幣が古くからあったということは貴兄の言われる通りで、アジアではヨーロッパなどより余程以前から使われている。はじめは呪術的な意味のものだったようだが、次第に交換手段、交換の媒介物として使用されて、物資を貯蔵する代りに貨幣を貯蔵すれば、何でも希望のものが得られるために知的に進んだ者は致富の道として貨幣を蓄積することを考えた。もちろん貨幣として交換の媒介物と認められるために一般的な容認が必要だし、そのためにアジアのように古い世界では国家権力に結びついており、インドのように記録のない古代の歴史が出土した貨幣によって年代比較が出来たという例もあ

る。ヨーロッパの経済史でも小アジアのリディア王の刻印のある金属棒が貨幣の始めてB.C七世紀頃としているしこのように貨幣としては権力に結びついていて、政経分離は初めからのことだ。金や銀の質や量が単位として採用され、その良否は直接物価に影響したが、今ではもう金本位を離脱して国家権力の信用による制度になった。権力によるにせよ、よらないにせよ通貨は交換手段として一般に承認されたものという安全性を持ち、それによって欲しいものは何でも買えることから、多く蓄積したものが多くの購買力、人間の売買でもできるという一種の権力までも持つことになっている。物質的な意味ではそれが何不自由もない幸福ということに外ならない。仏典でも幸福なものとして、こうした王者が描かれている。普遍的な一種のフォティズムであって、通貨さえ持てば幸福になれるといった信仰が行き渡っている訳だ。こうした信仰に生きて一生懸命に蓄積に努力している間は、確かに幸福と言える。この信仰がある限り蓄積に成功した後も幸福と言えるだろう。そして一般人もそう考える者が多いのが事実だ。しかし人生には危機がある雨も降り、風も吹く。「人間」について考えれば、こうして追求した幸福は泡沫のようなものと、考え直されるだろう。聖書から例を引こう。ある金持が自分の靈魂に

言った。「靈魂よ、もうおまえはこれから長い年月をすごせる財をたくわえたから、休め、飲め、食べよ、楽しめ」。ところが神の声がひびいた。「おろか者よ、汝の靈魂は今晩取られるのだ。そして汝の富はどうなるのだ」と。また森永製菓の創立者で初代社長だった森永太一翁は、ホークネス教会の中田重治氏の話に、涙と鼻で顔をクチャクチャにして「どうしたらその天国に行く確信が持てるか」と聞いたという。チッソの社長は多分「おれが患者たちに屈したら、株主たちに申し訳ないし、幾万の社員や労働者を路頭に迷わせねばならぬ」と考えているかも知れない。資本家でなくてもチッソの労働組合員は患者たちをつまみ出したと言う。オマンマの食い上げになってはと思ったのだらう。自分たちの幸福を守る。これが大部の人の努力することであるが、その幸福は金銭によって得られる物質的幸福である。科学によって開発されたいろいろなものは医療にいたるまで、金銭という代償なしには得られない。

幸福は心の持ち方だと宗教家は言うが、孔子の弟子の顔回が水を飲み、肘を枕にして生を楽しんだり、出家して身を雲水にまかせる幸福は万人に望めることではない。精神的幸福も、万人が共に生きることを目指すべきで、マルクス主義のように誰かが権力を持つことは、資本主

義で富を独占するのと同じことだ。
舌足らずのような回答で申し訳ない。限られた紙面なので了解願いたい。

× アナルコ・キャピタリズム

思いもよらなかったアナルコ・キャピタリストの機関紙「ニュー・バナ」を受取った。水道橋の終着駅に集った仲間にも見せた。詳細に紹介する訳にも行かないがアメリカの社会における自由について考えれば、こうしたものの出現する可能性は以前から存在していたと思われる。少し抜書きするとしよう。

実存は現実だ。人間の良心とは独立に、物事はあるがままである。AはAなのだ。

人間は感覚によって提供されたデータの知覚、確認および統合を通じて現実の事実を知る。この知識がその価値評価の根拠をなし、理性は人間の知識と行動の唯一のカイドである。

人間は他者の目的の手段であってはならない。他者の犠牲とならず、他者を犠牲とせず、自己のために生きねばならない。各人は自身の生命、自由、財産に対する奪うことのできない基本的権利を持っている。

こうした原則に一致する唯一の社会経済組織こそ、自

由放任(レッセ・フール)資本主義である。・・・

道徳的人間、道徳的社会は強制的に管理し、監督し、奴隷化を行なう者共に対して、自衛行動の義務がある。

送って来たのは第三号本年二月二十五日付のものだがマレー・ロスバード博士(ニューヨーク市立大学、ブルクリン工芸学校教授、数種の著述がある)との独占インタビューを特集している。そして真のアナーキズムはキャピタリズムであり、キャピタリズムはアナーキズムであり、国家は本質的に盗賊の一団であると叫び、リパータリアンと称している。その活動としては納税拒否をやっており、その機関紙は州によっては禁圧されているようである。

×

『不倫』発展的解体、情報誌として『アナルヒア』を発刊いたしました。札幌市中央局私書箱二五七号 川端『週刊かすたむ』復刊第一号、新鮮、自由、さらに伸びよ。東京新宿百人町1・13・29 柴山荘1号・カスタム『表象』第一号、茅ヶ崎市中海岸2・3・24 小田切方・相田博君によって創刊された78ページの堂々たる自立誌アナーキズム10目次/社会は防衛するか/情況・千坂 商業ジャーナリズム策動の新展開/アナーキズム文学(3)アナーキストの文学かアナーキズム文学か/一革命家の告

白/他

新宿区東大久保一の四六四 松喜ビル、バルカン社刊

読書会のお知らせ

バック・ニン著「神と国家」

欧米でバック・ニンへの関心が高まって彼の著書の英仏独訳が相次いででました。例えばフランス人はバック・ニンを「永遠の異議申立て」と理解しています。私達はこの時期にあたり親しく彼の「人神と国家」を読んでみようと考えています。テキストは英訳を利用するが、その底本となった仏文を参照する予定です。他国語を媒体とするのは自国語で固定された意味しか受け取れない概念を各自の解釈と自由裁量の領域へ還元し、新鮮な意味づけを模索しようとの意気込みです。ご理解の上、この共同討議に参加して下さい。詳細は8月号で発表します。

開講日 9月2日以降毎土曜日(4回) 10月は会場確保次第継続の予定。

場所 豊島振興会館小会議室午後六時十五分〜九時迄
費用 テキスト代と会場費はきまり次第連絡します。

解説者 はしもとよしはる 三浦精一

尚会場の都合で同行者は十五〜二十名しかはいれませんが、なるべく早目に申込んで下さい。

邪魔者は殺せ！そして サッコとヴァンゼッチは殺された。

三 浦 精 一

一九二七年八月二十二日夜零時、ニコラ・サッコ（靴縁取工）とバルトロメオ・ヴァンゼッチ（魚行商人）がアメリカ・マサチューセッツ州ボストンで電気椅子に坐らされた。椅子にかけて、看守が革紐をつけたとき、サッコは「ウィウ・ラ・アナルキア」（アナルシー万才）と叫び、「妻よ、子供らよ、すべての友人たちよ、さよなら」、そして「皆さん、さよなら。母よさよなら」と言った。ヴァンゼッチは死刑執行室の一人一人に握手して「さよなら」を言い、椅子にかけて「私はあるときある罪を犯したことがある以外は、いかなる犯罪も犯していない。私のためにいろいろなことをして下さった皆さんに感謝します。私はこの犯罪にも、すべての犯罪にも無実です」。「今私にこのようなことをする人達を許したいと思います」と言った。こうして無実の二人のアナルシスト、アメリカの体制に邪魔な二人は消された。

二人はイタリア移民としてサッコが十七才、ヴァンゼッチが二十一才か二才のとき、アメリカに来て、まだ英

語も話せず、イタリア人部落に住んでいた。サッコは行動的、ヴァンゼッチは詩人肌で、二人ともイタリア人アナルシスト・ガレアニの弟子だった。

二人が捕えられた事件は一九一九年十二月二十四日のL・Q・ホワイト製靴会社の賃金輸送車を襲撃した「ブリッジウォーター強盗殺人未遂事件」と、それから三ヶ月後の四月十五日、スレータ・モリル製靴会社の現金輸送車を襲って現金を奪ったという、二つの事件である。

イタリア人移民はアングロ・サクソン系優位のアメリカでは軽蔑され、釜ヶ崎や山谷のような地域で貧しく生きていた。大きな犯罪が起ると一歩先に捜査の対象となり、ギャング映画の登場人物はたいていイタリア人であった。日本人移民も、シナ人も、ブエルトリコ人も、黒人と共に差別されていた。こうした被差別会社で、英語も不自由なサッコやヴァンゼッチのアリバイを申立てる者が数名出ても、一向に取上げて貰えず、警察当局の組立てた筋書通りに起訴され、ブリッジウォーター事件の

公判では十五年の刑を受け、さらにも一つのスレータ

モリル会社の事件で起訴された。死体から出た弾丸もサッコのピストルとは口径が違っていた。サッコのピストルから出たものと証言された。ユダヤ人の服地商が、その時刻にヴァンゼッチに服地を売っていたことを証言しても無駄だった。無力な二人にこんな組織的強盗ができないことは、あまりにも明白なので、全世界的な救援活動が起った。六年目の一九二六年五月十二日アメリカ大審院は上告を棄却して死刑が確定した。

ベルリンでも大デモが行われ、ロンドンでは騎馬警官が出動した。ジュネーブではアメリカ大使館や領事館の窓という窓が破られた。オーストラリアで同情ストに参加して千八百人が職を失ない、南アフリカのヨハネスブルグではアメリカ国旗が焼かれた。パリでは大群集を追求するために警官が動員された。日本からも抗議が送られた。フランス人の文豪アナトール・フランシスも手紙を書いた。しかしアメリカ政府は何の反応も示さなかった。

政府にとって邪魔な無政府主義者は殺すべきだし、再審して無実を認めれば司法官僚の威信が傷つけられる。何処の国でも官僚組織が政府の支柱で人民は欺瞞し、支配すべき対象でしかない。右翼やギャングも人民を恐喝するために有用だ。二人の無実を認めるためにはギャン

グ組織に手をつけることになるのだ。

サッコは獄中で英語を勉強し、息子のダンテに手紙を書いた。この手紙は今はアメリカの教養書にもとり入れられて、崇高な精神が読む人を動かす。正しい人が十字架を負わねばならないことも、民衆は自分たちが十字架にかけた人の墓を美々しくかざり立てることが好きだということ、昔も今も変わらない。

サッコとヴァンゼッチも、幸徳たちも、政府の断固たる決意によって死刑になった。断固たる決意が今ヴェトナムの民衆を殺し、光栄ある撤兵の日まで殺し続けるのだ。権力は常に「光栄」を求める。断庄はいつでも「政府の光栄ある体面、威信を守るため」である。赤軍派の事件を利用して教育行政を強化するのも、憲法を歪曲して軍国日本を復活させようとする所にも、権力の威信を保つための民衆欺瞞が見られるではないか。思想断庄のために事件をデッチあげるのには警察や検察の常習だ。

権力の前における人間の良心の存在はサッコとヴァンゼッチの運命と同様なのだ。

- ☆永久革命への騎士 高尾平兵衛 八九〇円 千二一〇円
- ☆アナーキズム運動年表 萩原晋太郎著 二五〇円 千五五円
- ☆アナルコ・サンジカリズム 萩原晋太郎著 二五〇円 千八〇円
- ☆社会主義の下での人間の魂 オスカ・ワイルド著 はしもと・よしはる訳 一八〇円 千五五円
- ☆政治の正義 1 財産編 四〇〇円 千八〇円
- ☆科学から自由へ 0・マーティン著 遠藤訳 二五〇円 千七〇円
- ☆風雪を越えて 山口健助著 一五〇円 千五五円
- ☆日本無政府主義運動史 第一編 黒戦社版 三五〇円 千七〇円
- ☆強権主義の解剖 武 良二著 二〇〇円 千五五円
- ☆「大地」誌に発表された幸徳事件 はしもと・よしはる訳 二〇〇円 千五五円
- ☆無政府主義者はこう答える 岩佐作太郎著 一五〇円 千五五円
- ☆獄 窓 から 和田久太郎著 近藤憲二編 八〇〇円 千一〇〇円
- ☆死刑囚の思い出 増補決定版 古田大次郎著 七〇〇円 千八〇円
- ☆無政府共産主義、人類解放への道 八太舟三著 七〇〇円 千八〇円
- ☆A H A バンプ・君高校生？読んでみないか 一〇〇円 千五五円
- ☆無政府主義組織論・無政府主義とサンジカリズム エンリコ・マラテスタ著 復刻版 一〇〇円 千四〇円
- ☆階級闘争説の誤謬 八太舟三著 一三〇円 千四〇円
- ☆フランス人よ共和主義者になりたければ更に努力を！ マルキ・ド・サド著 はしもと・よしはる訳 二五〇円 千七〇円
- ☆正義と道徳 麻生義訳 二五〇円 千四〇円
- ☆難波大助大逆事件 九〇〇円 千八五円

読者への特別サービス(五月末迄、以後は定価通り)

本会で萩原晋太郎著『永久革命への騎士・高尾平兵衛』を刊行！
口絵写真八頁、本文二二〇頁B六判活版限定千部(定価千共千円)
大正の激動期に社会運動の真髄を貫いて、右翼の手に倒れた革命児の、波瀾万丈の一大ドキュメントである。

幸徳や大杉の資料は多いが、当時労働者に大きな影響を与えた高尾の言行を発掘したのは本書が初めてである。貴重な運動資料だ。目次の大要を以下に記す。ふるって申込を願う。

- 第一部 揺籃の諫早 1 風雲児誕生 2 系図 3 諫早の風物詩 他
- 第二部 放浪の青春 1 大阪でもまれる 2 上京そして大陸へ出奔
- 第三部 激動の晩年 1 夜明け(大逆事件、近代思想、平民新聞)
- 2 北風会での出会い 3 大日本鉱山労働同盟会 4 法廷裸体事件
- 5 平公の手紙 6 大杉とも別れて(『労働運動』『労働者』、大杉栄との論争、彼の思想) 7 再び足尾争議に 8 ロシア飢饉救済運動 9 大庭柯公事件 10 極東民族大会 11 密行中に女の世話
- 12 第一次共産党 13 戦線同盟 14 スト破りから託状をとる
- 第四部 反逆児の最後 1 運命の朝 2 虫の知らせか 3 その後の追跡 4 社会葬第一号 5 鎮魂譜 6 後日譚(遺骨諫早に帰る、殺人弁護士と長山のその後)
- 年譜、註解、あとがき (序文は平岩巖氏による)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和47年7月15日発行 Vo. III No 8

編集兼発行者 三 浦 精 一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)